



第9回日英シンポジウムを通じた国際交流

9th RSC-CSJ Joint Symposium: Designing Molecular Function at the Nano-Scale: Catalysis, Materials and Supramolecular Chemistry

日英シンポジウムとは？

日本化学会における国際活動の一環として、英国王立化学会 (Royal Society of Chemistry; RSC) と連携し、日英シンポジウムが企画・開催されています。このシンポジウムは、2010年7月に締結した日本化学会-英国王立化学会間の日英国際協力協定に基づいて、「次世代を担う若手化学者が特定のテーマの下、少人数でシンポジウム行う」という主旨で企画されています。日本の若手研究者が英国の研究者と親密な交流を図るには大変良い企画と考えられます。この企画を通して、両国間の新たな、そしてより親密な交流関係が構築できると期待されています。さらに、日本および英国のトップレベルの化学者が集い、深い議論を行うことで、引いては日本の科学技術の向上にも貢献していくと考えられます。

“Designing Molecular Function at the Nano-Scale: Catalysis, Materials and Supramolecular Chemistry”

今回で日英シンポジウムは第9回を迎え、ロンドンで開催されました。過去の日英シンポジウムは、日本および英国で相互に開催されており、第1回は2007年3月第87春季年会 (関西大) にて開催、その後、第2回2008年9月 (Belfast, UK)、第3回2010年7月 (RSC, Burlington House, UK)、第4回2013年3月第93春季年会 (立命館大)、第5回2014年7月 (Dublin, Ireland)、第6回2015年3



LondonにあるRSC Burlington Houseにて、日本側からの参加者

月第95春季年会 (日大)、第7回2016年6月 (London, UK)、そして第8回を2017年3月第97春季年会 (慶應大) において開催してきました。実は筆者 (高島 (阪大)) は、第5回のDublinでのシンポジウムにも参加しております。高島が、Univ. Southamptonに短期留学していた際に知り合った学生も、そのときのシンポジウムに参加しており、大いに楽しんだ思い出が残っています。

今回の企画では、日本化学会会長 川合眞紀先生にお導きいただき、日本化学会新領域研究グループ「精密物質変換のための分子空間化学」のメンバーの中から、超分子化学・触媒化学分野で研究を行っている白川誠司 (長崎大)、熊谷直哉氏 (微化研)、生越友樹氏 (金沢大)、長田裕也氏 (京大)、高島義徳 (阪大) が参加しました。また深澤愛子先生 (名大、現京大 iCeMS) にも参加いただき、英国に赴きました。



Prof. J. Clayden (Univ. Bristol) (左) と Prof. S. Goldup (Univ. Southampton) (右)



Prof. J. Nitschke (Univ. Cambridge) (左) と Prof. A. L. Lee (Heriot Watt Univ.) (右)



英国側の講演者

英国側からは Prof. Lesley Yellowlees (Univ. Edinburgh) をはじめ、講演者として Prof. Jonathan Clayden (Univ. Bristol), Prof. Steve Goldup (Univ. Southampton), Prof. Ai Lan Lee (Heriot Watt Univ.), Prof. Jonathan Nitschke (Univ. Cambridge), Prof. Harry Anderson (Univ. Oxford) が参加し、最新の研究内容を紹介いただきました。

Prof. Lesley Yellowlees は、1841年に発足した伝統ある RSC におい



川合眞紀会長 (左) と Prof. Lesley Yellowlees 元会長 (2012~2014年) (右)

て、初の女性会長であり、2012年から2年間、会長を務められました。もともとは無機電気化学者とのことです。今回のシンポジウムでは、冒頭に開会の辞を述べていただき、大変光栄な限りです。

活発な研究討論!

さて、やはり重要なことは化学を通じた交流であり、我々の共通言語である“Chemistry”を通して、両国の最新の研究内容を紹介することです。講演を通して、各々の研究内容の理解を深めるだけでなく、両国の文化的相違から来る化学研究の違いについても理解を深められました。

Prof. J. Clayden からは独自に開発した人工ペプチドのコンフォメーション制御に関する研究が紹介されました。Prof. A. L. Lee からは様々なアプローチでの独自の C-H 結合活性化反応の最新の成果が紹介されました。Prof. J. Nitschke からは独自のかご状分子について報告がなされました。特にかご内部での反応や cyclic [3]catenane 合成などについて紹介がなされました。Prof. S. Goldup は機械的インターロック分子の分野において多彩な研究成果を挙げており、40代の研究者としてこの分野を世界的にリードしています。今回は特にキラルロタキサンやロタキサンを用いた触媒反応の最新の成果が紹介されました。Prof. H. Anderson は金属ポルフィリンと鑄型分子の錯体形成を用いた巨大環状 π 共役系に関する最新の

研究成果を披露され、その構造の美しさに多くの聴衆が魅了されました。大須賀先生(京大)と親交が深いことでも有名で、当日の講演でも大須賀先生の研究を引用・紹介されていました。



Prof. H. Anderson
(Univ. Oxford)

晩餐会にて、日英交流

シンポジウム後の晩餐会は、講演会場となった RSC の Burlington House で開催されました。Burlington House は歴史ある建造物で、その中の化学雑誌の本棚に囲まれた独特の空間で、晩餐会が執り行われました。化学独特の趣を感じながらのディナーとなり、食事のみならずその雰囲気を楽しめることができました。晩餐会での会話は化学の話題に留まらず、英国と日本の文化についてなど、様々な話題で大いに盛り上がりしました。同日に偶然、シンポジウム会場近くのトラファルガー広場にて Japan Matsuri なる催しが開かれていたことや、本庶佑先生のノーベル生理学・医学賞受賞が発表されたこともあり、話題に事欠かない和やかな宴となりました。もちろん、Burlington House の本棚に、*Bull. Chem. Soc. Jpn.* や *Chem. Lett.* が取められていました。



“Chemistry”を感じさせる“おもてなし”

おわりに

改めて、Prof. Yellowleesをはじめ、英国王立化学会の Sarah Thomas 氏や Stuart Govan 氏らの手厚いサポート、丁寧なおもてなしに深く感謝申し上げます。また今回を含め、日英シンポジウムの実現において RSC 日本事務局の浦上裕光氏に大変なご尽力をいただいております。心から御礼を申し上げます。さて、次回の本シンポジウムは第10回ということになり、日本での開催が予定されています。RSC の会員の皆様との更なる友好関係の構築と情報交流により、両国の化学交流がさらに発展を遂げていくための重要なイベントとなります。日本側から、化学を通してどのような“おもてなし”が企画されるかが楽しみなところです。今回貴重な経験をさせていただいた身として、このような素晴らしい日英の交流企画が今後も継続されていくことを切に願う次第です。

[白川誠司(長崎大学)・高島義徳(大阪大学)]

© 2019 The Chemical Society of Japan